

それは実さんのお父さんからの電報で「実さんに召集令状が来たからすぐ帰るようにしてもらいたい」という電報でした。

このころは日支事変が起こっていて、若い者が次々軍隊に召集されていたのです。召集令状が来るとみな応召者は赤だすきをかけ、盛んな見送りを受けて応召して行ったものでしたが、その召集令状が実さんに来たのです。私は早速山口支部長さんに電話をかけたのですが、まだ帰っておられなかったので、帰られたらすぐこのことをお伝えしていただくようにとお頼みしたのでした。後で聞くと山口支部長さんは、早速実さんに赤だすきをかけさせ、支部員たちみんなで盛大に送られたということでした。

実さんは私の通知次第、東京に来るようにしていたのでした。それは実さんをもっと勉強させたいと思い、東京に呼んでどこかの大学に通わせ、そのかたわら速記の練習をさせたいと思い、その話をして決めていたのです。実さんは家のため大事な仕事をしていたのですが、お母さんに涙を流して熱心に東京行きを話すので、お母さんたちも喜んで承諾しておられたのです。お母さんは政治家として、また文豪として有名な下村海南博士の親戚にあたる人でした。実さんは国難にあたるため、勇ましく応召して行ったのでした。終戦後生還して今は大阪に「一福」という食堂を経営しています。

長男英生さんはいつの間に練習したのか、速記が非常に上手になっておられたのでした。昭和十四年、